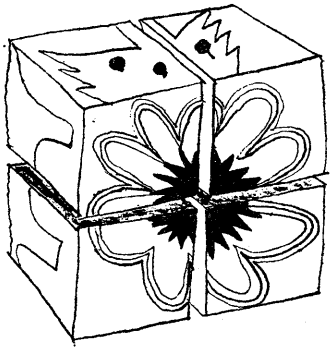
「人見知り」再考

小川清実



最近、やっと次女のT（一歳十か月）を連れて、安心して外出できるようになった。長女のM（三歳）の時にはこのようなことで困ったという経験は全くなかったので、一層なぜなのかという疑問が生じていた。それは何かというと、次のようなことなのだ。

いわゆる「人見知り」がひどく、一歳五か月になっても一歳六か月を過ぎても全くなくなる気配がない。ことばは、生後十か月頃から「ワンワン」などと話し出し、一歳四か月には二語文で話している子どもであるのに、である。買い物の際に、知らない人からにこっとほほえみかけられれば、目をギュッと閉じ、体を硬直させて泣き出す。そして母親の私の首に、私が苦しいほどの力で腕をまきつけ、私が「もう、おばちゃん、行っちゃったから大丈夫よ」というまで、その状態を保ち続けるのである。全く見知らぬ人ばかりではなく、しばしば会っている近所の「おばちゃん」にさえ、二、三日、間があけ

ば、ひどい「人見知り」をくり返す。

わが家は来客が多く、Tは、生後五、六ヵ月の頃から、新しい人に出会うたびに「人見知り」をくり返していた。この頃は、泣いて、母親に抱かれていれば安心していた。そんな中で、Tがほとんど「人見知り」をしない人もいることに気づいた。普段は、見知らぬ人に対しては必ずといっていいほど「人見知り」をおこすTが全く泣かないですむ、それどころか、はじめて出会った人のそばで遊んでいるのを見て、大変驚いた。同じ頃、別の人に対しては、ひどい「人見知り」をし、母親の胸に顔を埋め、絶対にその人を見ないこともあった。

Tがどういう人に対して強く、どういう人には弱いのか。注意してみていると、漠然とではあるが、次のような傾向に気づいたのである。Tが泣かない人は、目があまり大きくない、ぱっちりとしていない、いわゆる細目のタイプであり、反対に大泣きをする人は、ぱっちりとした大きな目をしたタイプなのである。このことに気づいてから注意してみると、私の予感はたいていあたっていた。

月齢を経るに従い、Tの「人見知り」の程度は変化していく。見知らぬ人に出会うと、泣かないで、ギュッと目を閉じ、その人が行ってしまうまで、息をひそめて待っているような状態を続けるようになった。乳母車にのっていて、目をギュッとしばらくの間、閉じているようなこともあった。同じ頃、人に対してだけではなく、物に対しても同じような態度をとるようになった。

（一歳五か月の頃）

ある中華料理店に行ったときのことである。大好きなラーメンが運ばれてきて、Tは自分でフォークをつかって食べはじめた。食べている手を休め、イスの上に立って後ろを向いた。すると急に目をギュッと閉じ、私の首にしっかりと抱きついてきた。私は、またはじまったと思い、抱いたまま、私の食事を続けていた。けれどもフンフンと言って、この場所を動きたいらしい。

先に食事を済ませた夫がTを抱いて外に出ていった。外に出ると、目を開けて、安心して楽しそうにしている。再び店の中に入ってくると、また外に行きたがる。どうやらTは見たくないものを見てしまったようである。Tが見たくないものとは、木の根の大きな置き物であった。それにはたくさんの穴があいていて、外からの光が流れている。私はTに「これは木なのよ。なんでもないの」と言って、その置き物を手で叩き、Tにも手で触れさせた。Tは、一応手でさわってはみたものの、やはりいやらしく、早く外へ出たがった。

(一歳六か月の頃)

外出し、昼食時になったので、ある店に入り、料理を注文して待っていた。突然、目をギュッと閉じ、私の胸に顔を埋めてきた。私が何度も「大丈夫よ」と言っても全然効果がなく、いつのまにかそのまま眠ってしまった。どうも店の中央にある格子柄の衝立を見て不安になったようだ。

これら、Tが「人見知り」をおこした人や物に共通しているのは、すべて「目のようなもの」だといえる。Tにとって不安をひきおこすのは、ぱっちりとした人の目や、あたかも目のようにみえる、光を通す木の穴や格子なのである。

ところが、あることがきっかけとなって、「人見知り」があまり起こらなくなった。

(一歳七か月の頃)

姉のMがサインペンで紙に描いていると、そのそばでTもなぐり書きをしていた。描いたものを「オメメ」と言って私に示した。命名したのははじめてだった。

その後、これまでのような「人見知り」はあまりおこさなくなった。

この一歳七ヵ月の頃のTのことは大変印象深い。これまで「目のようなもの」に対してすべて不安を示していたのに、描いたものにはじめて命名したものは、「オメメ」であったのだ。上の娘のMも、はじめて描いたものに命名したのは「オメメ」であったが、そのときには、子どもにとっては「目」が重要なんだろうと思う程度で、深く考察しようとは思わなかった。けれどもTの場合は違った。何気なく「コレ、オメメ」と言ったTを見て、母親である私は感動さえ覚えた。感動と共に、あれほどいやがっていた目をどうして描いたのだろうかという疑問も生じた。一瞬、Tは目を克服したのかなとも思ったのだが、この確証は何もなかった。が、私の予感のように、それ以後、これまでのような「人見知り」はほとんど起こしていないのである。もちろん、新しい人や新しい環境に出会ったとき、慣れるまで時間が必要なのだが、母親に抱かれて、しっかりと周囲を見、そこが親しみのある、安心できるところだと思えば、いつものように行動するようになった。Tがこのようになったのはなぜなのだろうか。Tがこれまで示していた「人見知り」とは、いったい何なのだろうか。

◇　◇　◇

「人見知り」は、一般に生後五、六ヵ月頃から生じる、ごく当然の行動と考えられている。親しい人とそうでない人との区別がつくという意味で、発達の上では重要なポイントといわれている。

なぜ「人見知り」が起こるかを解釈する新しい試みが最近、報告されている。その一例としてコミュニケーションの面から試みているイギリスのバウアーたちの説を岡本夏木は次のように述べている。

「……　つまり、零歳台後半の協約性というのは、まだ、ごく身近で毎日密接に自分と交渉し合うごく少数の人とのあいだにのみ成立してきている微妙な協約であって、広く一般の人にも通ずる規約とは程遠い。事実母親

と子どもの楽しいかけ合いを第三者が見ても、子どもの動作や発声が何を意図し、また母親のある動作をなぜそんなによろこんでいるのかは、母親の通訳をまたねばならぬことが多い。

愛着の対象となるのは、このように自分とコミュニケーションのコードを共有し、それによるやりとりを互いによろこび合い、通じ合う人だとする解釈である。見知らぬ人とは、自分の了解不能なシグナルを出しながら迫ってくる人であり、また、こちらから出しているシグナルにはちぐはぐな応えかたしかしてこない人であり、それが子どもに大きな不安や当惑をもたらすと考えるのである。子どもにとって『見知らぬ人』とは、その人が出すシグナルの意味がわからない人ということになる。[注1]」

このバウアーたちの説から、子どもが親しい人と認めるのは、自分とコミュニケーションのコードが共有できる場合だということがわかる。そのコミュニケーションのコードを共有できるかどうかを判断するために最もシグナルを出しているのは、人の「目」と考えられるのではないだろうか。もちろん、「目」だけではなく、顔の表情や人の声、においなどのすべてからシグナルが出ているのだが、やはりその中で重要な部分は「目」と考えられるだろう。子どもが人の「目」に反応することは、高橋道子の実験からもよく知られている。さらに、生まれたての赤ん坊でさえ、母親に抱かれるとすぐに母親の目を見ようと自分の目を開こうとすることが最近わかってきた。

人の「目」は体の中、特に顔の中で最も目立つ部分であることは確かである。「目」だけが光の反射をうけてキラキラしているのである。生まれたての赤ん坊が「目」を見るのは、抱かれている状態で見える最も明るい部分だからということもできる。

「目」をつかう活動には二つある。それは目を開くことと目を閉じることである。眠っていないのに目を閉じることは、何らかの意味があると考えられる。

目を閉じること、そして目を開いていることについ

て、津守真は次のような考察をしている。

津守は、夜寝る前になかなか洋服を着替えようとしない子どもに、母親が「きっとねまきを着られないんだわ」と言って目をつぶっていると、子どもはさっとねまきに着替えた事例を示し、そこから次のように述べている。

「目を閉じるということは、おとなが子どもに対して向ける、方向をもった意志を停止させることである。[注2]」

「目を閉じて相手に加える力が消えると、子どもの側の反発力も消えて、それまで反発力の下にかくれていたその逆の力がはたらきはじめる。そして、子どもは自分で選択して、自分で行動をきめるであろう。[注3]」

ここでは、おとなが子どもを見る場合のことを述べている。おとなが目を閉じることは、子どもに向ける力を消すことになるということである。津守はまた、次のように述べている。

「目を閉じることの作用から推論するならば、目を開いているときにはそれだけで、相手に力を加えていることになる。[注4]」

このことについては、動物行動学の研究を思い起こせば、さらに理解しやすくなる。つまり、動物たちにとって、目を見合うことは戦いの合図であるということである。動物同志が見合い、弱者の方が目をそらす。「見合う」行動だけで相手の力が自分よりも強いことがわかるということである。「見る」行動はやはり、それだけで相手に力を加えていることなのである。

それでは、子どもが自らの目を閉じる行為は、どういうことを意味するのだろうか。動物行動学者のティンバーゲン夫婦は、私たちに大変興味ある提言をしている。それは、私たち人間は、動物と比較して、不用意に人、小さな子どもと出会うということである。不用意に出会うというのは、おとなが見知らぬ小さな子どもの目をまっすぐに見るということである。子どもが見知らぬ人と

出会ったときに、どのように反応するかについて、ティンバーゲンは次のように述べている。

「最初、子どもはまず視線を合わせる（すなわち、自分を見ている見知らぬ人を見る）ことから始まって、さまざまな形の親しみや、対人的にプラスの行動を示すこともある。

それは、たとえば、目つきや体の姿勢などに示されるごく微妙な表現であり、よく見ていると、それが人に関心や親しみを表わすものであることがわかってくる。左右の口もとが（しばしば、ほんの一瞬）かすかに上に曲がることとか、じっと視線を向け続けていることなどもその例である。そのような表現は、よりはっきりしたものであることもあるし、だんだんはっきりしてくることもある。そして次のようなことが現われるようになる。たとえば、笑顔がしだいに本物になり、ついには『こぼれんばかり』の笑顔になること、子どもの方から進んで近寄ってくること、その他、観察者と、いろいろな形でのリラックスした、親しみのあるふざけ合いのようなやりとりをするようになることなどである――これはこちらにとっても何ともいえない満足感のある、感動的なものである。[注5]」

まず、ここでは対人的にプラスの行動について述べられている。しかし反対にマイナスの行動をとる場合もあり、次のように述べている。

「別な場合には、最初探るような目でチラッと見たあと、それに続いてマイナスの反応が起こることもある。この場合、その表現の仕方や示す行動の形はまことにさまざまであり、その一部は非常に微妙なものである。

たとえば、拒否的な態度の最もおだやかな表現のしかたはある種のまなざしによる表現のしかたであり、（よく小説などにも書かれてあるように）たいていの人はよく知っているのだが、ことばでは表現しにくい。しばしば『うつろな』とか、『ボーッとした』とか、『心の扉を

閉ざしてしまっている』とかいったようなことばで表現されている。それは漠然とした無表情な目つきで、しばしばおとなの目を通り過ごしたその向こうを見ているように見える（このことは、実験的な場面で子どもの反応を記述する時に、しばしば見落されていることであるが、ひとつの重要な見どころである）[注6]。」

「さて、そこで、子どもの『最初の』このような行動に対して、おとながどういう反応をするかが、こんどは逆に子どもに伝わって、それが子どもに強力な影響を与える。そしてそれが次の、子どもの側の反応を引き起こすのである。もし観察者が子どもを見つめ続けていると、そのことのために、子どもの最初の反応がますます強められていき、ついに子どもは目を細めたり、あるいは全く閉じてしまうことすらあるものである[注7]。」

子どもがこのように目をそらしたり、目を閉じたりする行動をとるのは、相手より自分の方が弱者であるという意志を表現しているに他ならない。それだけではなく、目を閉じることは、自分に加えられる力を遮断することを意味している。目の会った相手から送られてくる力を受け入れるには不安があまりにも大きいので、目を閉じてしまうのだと考えられる。けれども目を閉じ続けることはできず、また目を開くことになる。

◇　◇　◇

これまで、人の「目」について考察してきたが、Tが示したような「もの見知り」はなぜ起こるのだろうか。中沢和子は「もの見知り」について次のように述べている。

「もの見知りをよく起こすのは、大きい縫いぐるみの動物や人形、ゼンマイ仕掛けで太鼓を叩く猿や動くアヒル、ビニール製の動物などが多い。保育園の観察では、一歳前後の子どもが、それまで気にしなかった大きな人形に恐怖を示すときがあるという[注8]。」

娘のTも前に述べた事例の他に、ぬいぐるみの動物、人形は大嫌いだった。お客様がもってきたおみやげの人形を見ては泣き出した。寝かせると目を閉じる人形に対しては、しまってある箱の近くを通るのさえいやがった。姫だるまのような人形もこわがり、私は、見えないように風呂敷などをかけたりしたものだった。Tは「もの見知り」も「人見知り」と同時になくなったようだ。中沢は続けてこう述べている。

「なぜこのような『もの見知り』が起こるかはよくわからないが、圧倒的に人形と動物が多く、乗りもののおもちゃ、積木、ボール類の例はまだ得ていない。おそらく、なにかこのような生き物まがいのものにもの見知りを引き起こす原因があると考えられる。[注9]」

中沢和子は「生き物まがいのもの」と言っているが、これは「目」のあるものと解釈できるだろう。「もの見知り」がなぜおこるのかということを解釈するのに、やはりバウアーたちの説は有効となるだろう。子どもは、生後五、六ヵ月前後から人や人らしいものに対して、自分とコミュニケーションのコードを共有できるかどうか、積極的にシグナルを出していると考えられる。そのシグナルは、相手の手や背中なのではなく、特に「目」に向かって出しているのである。これはティンバーゲンたちの観察からもいえることだろう。いつも見慣れている、ほほえみかける「目」に対しては親しみを感じ、たとえ見慣れていても、人形の目のように向こうから何もシグナルを出してこないときには、泣いたり、親にしがみついたりする。つまり、コードが共有できそうにない場合には不安を示す。これを私たちはいわゆる「人見知り」、「もの見知り」と呼んでいるのである。

◇　◇　◇

Tの「人見知り」や「もの見知り」がなくなったきっかけとなった一歳七ヵ月の頃の事例は忘れられない。描

いたものにはじめて「目」と命名したことは、ことばの発達と関係があるだろう。しかし、ここではじめて命名したものが、「目」であったこと、そしてそれをきっかけとして、「目」のある見知らぬ、親しくないものに対する不安をあまり示さなくなったことこそTにとって意味があると考えられる。Tが「オメメ」といったそれは、母親の「目」であったかもしれない。あるいは父親の「目」かもしれない。いずれにしろ、Tが描いたものは「目」という器官なのではなく、その「目」をもった人間と考えられる。それゆえ、「目」が不安をもたらすものではなく、にこにこと笑ってくれ、自分を受け入れてくれる存在であることなどを認識したと考えられる。

現在、Tは一歳十か月になり、本当にのびのびと活発に遊んでいる。新しい人に出会ったときには、やはり時間がかかることが多いが、比較的短時間のうちに親しくなって、日常同様にふるまっている。「目」を描いた頃までは、全く母親から離れられなかったのであるが、それからは、母親を全く必要としないで、姉のMや近所の子どもたちと遊んでいる。自分がもっているおもちゃを他の子どもにとられたりすると、大声で「ダメ」と言ってとり返す。もし相手が返してくれなければ、返してくれるまで、その物をしっかりと摑み、残った方の手で相手を叩いたり、髪の毛をひっぱったり、果てはかみついたりなど、様々な方法を試み、必ず自分の力で解決する。姉のMがすぐに親に助けを求めてくるのに対し、何ともたのもしい存在である。

◇　◇　◇

これまで、Tの「人見知り」の克服の過程について考察をしてきた。母親や父親にとって、子どものことで悩みや不安はいろいろあるものである。私もTのひどい「人見知り」には時には困ってしまうこともあった。常に心にひっかかっていた不安といってもいいものであった。今回考察してみて気づいたことであるが、そのような不安や悩みは、早く解決しようとしないで、じっくり

と付き合う必要があるのだということである。時間をかけて考え、実際に保育していく過程で、自ずと解決していくものではないかと考えている。おそらく親であれば、子どものことで何かしら気になったり、困っていることがあると思うが、そのようなことについて考えることは子どもだけではなく、親にとってもたいへん重要なことなのだろう。困っていることをマイナスの要因と考えずにプラスの要因ととらえ、見つめ直すことがたいせつな保育の過程なのだと思っている。

注1　岡本夏木著『子どもとことば』岩波新書　一九八二年　六十三ページ

注2　津守真著『保育の体験と思索』大日本図書　昭和五十五年　一四六ページ

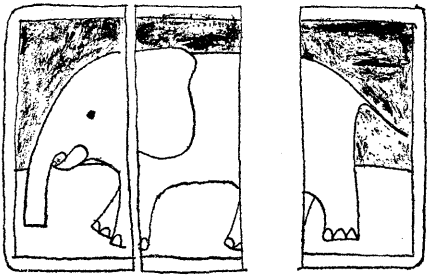
注3　前掲書　一四七ページ

注4　前掲書　一四七ページ

注5　N・ティンバーゲン夫妻著　田口恒夫訳編『自閉症・文明社会への動物行動学的アプローチ』新書館　一九七八年　三二ページ～三三ページ

注6　前掲書　三二ページ

注7　前掲書　三四ページ

注8　中沢和子著『イメージの誕生』日本放送出版協会　昭和五十四年　二三ページ

注9　前掲書　二三ページ